



どんぐり

No. 47

自然学校・体験活動フォーラム特集



兵庫県立

南但馬自然学校

HYOGO KENRITU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKŌ

(Nature Education Center)

基調講演

『体験を通じた学びの意味』



明治大学教授

星野 敏 男

〇はじめに

おはようございます。紹介いただきました星野です。

今日は『体験の意味』についての話をしようと思います。先程、紹介にもありましたが、明治大学に勤め始めた最初の頃、(担当していた)体育実技の授業には、とにかく(学生たちに)運動させることが求められていました。しかし、最近では、体育実技の授業が学生たちの数少ないコミュニケーションの場になっていくというところもあり、できるだけコミュニケーションがとれるような体育実技の授業というものが求められているようでもあります。

そういう意味では大学生も変わってきました。新年度最初の体育実技の授業でのことですが、学生同士も初めて顔を合わせるもので、体育館に集めて「体育館にある用具、何でも使って遊んでいいぞ」と言うのですが、遊べないんですね。コミュニケーションがとれない、そんな学生が増えてきているように思いますね。

ところで、私は東京に出て来て(大学の)研究室に入りました。その頃からキャンパスや登山とかをやるようになりました。東京で生活し始めたということの影響が大きかったんですが、「自然っていいなあ」と思い始めたんですね。そこから私の研究がスタートしました。

「自然はいいなと思うことはどこからくるのだろうか」とか「なぜ人間は自然をいいなと思うのだろうか」とかですね。そんなことばかり考えていました。いわゆる野外活動・野外運動・野外教育といった分野の研究を始めて三十年近くなるとすけども、ずっとその中で考えてきたこと、最近わかってきたことを含めて話していきたいと思います。

〇キャンパスとレタス

最近、学生たちとスキーに行った時のことなのですが、夕食の時、いきなり「先生、キャンパスとレタスの違いって何ですか?」と真剣に尋ねてきました。難しい質問するなあ

思って「何で?」と聞いたら、「見分けがつかないんです…」これには驚きました。

そしたら、隣に座っていた学生が「簡単だよ」って言うので、「君は知ってるの。すごいな」と聞き返すと、飲食店でバイトしているから知っているとのこと。その学生によると、「(飲食店で)刻んで出すのがキャンパス。葉っぱで出すのがレタス」なんだそうです。

(キャンパスとレタスの)見分けがつかないと言っていた学生はずっと東京育ちで、キャンパスとかレタスを丸ごと買った経験がないのです。その場では笑い話で済みましたが、これこそ体験不足の典型だなと思います。恐らく、キャンパスとレタスの見分け方以外にも分からないことはいっぱいあるのだろうし、最近こういう学生が増えてきましたね。

〇満天の星空とプラネタリウム

最近の学生さんは、流れ星を見たことがない、闇を経験したことがないという人も多い。真っ暗で目を開けても何も見えないというのは本来的な怖さというものがありませんね。人間が生物として本能的にもっているものです。そんな経験が無い学生をキャンパスに連れて行って、月明かりだとか満天の星空だとかを見せてやると学生たちは本当に感動しています。

流れ星も見たことがない学生が満天の星空を見ると「すごい!プラネタリウムみたい」って言います。そ

の学生はプラネタリウムは見たことがあるけど満天の星空は見たことがなくて、満天の星空を見たらプラネタリウムみたいと言う。違いますよね。「こつち(満天の星空)が本物で、プラネタリウムはこれ(満天の星空)を真似して作ってるんだよ」って話をするのですが、理解するまでにしばらく時間がかかるんです。

〇教室の中の教育と
教室の外での教育

私たちは野外運動とか野外活動、もちろん体育もそうですが、教室の外(野外)で学んだり体験したりすることが多いものですから、「教室の外、いわゆる野外教育(教室の外での教育)はどういう意味を持っていくのだろうか」ということをずっと考えてきました。いろんな説明の仕方がありますが、私はこのように考えています。

私が野外教育を研究し始めた時、「自然認識」つまり人は自然をどう見ているんだろうとか、自然をどう考えているんだろうとか、どう認知しているんだろうとかということがずっと疑問でした。芸術だとか哲学だとか社会学だとか教育学あるいは文学といった分野では自然というものやどういふふうに見えているんだろうといったことに興味を持って調べると、基本は人間が文字とか言葉とかを持ち始めた時からこの構図は生まれてきているということにだんだん気づいてきました。いろんな分野、教育学だけではなく、哲学、文学、心

【教室の中での教育】

〈形式知・科学的知〉

知識
 間接体験・客観的
 科学
 論理・文字・記号
 左脳・IQ
 デジタル
 大脳新皮質
 ロゴス
 よく学び
 人工・経験

【教室の外での教育】

〈暗黙知〉

理解・納得
 直接体験・主観的
 芸術・宗教
 イメージ・感性
 右脳・EQ
 アナログ
 大脳辺縁系
 パトス
 よく遊び
 自然・体験

【図1】教室の中での教育と教室の外での教育

理学、社会学、そういったところで人間が人間として言葉とか思考とかを持ったことと、本来、我々が生き物として持っているものとのバランスをとるのが、(非常に大事ではあるけれども)とても大事であるということがわかりました。

私たちが扱っている教室外での教育において学びの形として、どういう「知」を獲得しているんだろうと考えた時に、主に図1の右側の部分にあるような学び、あるいは体験をやっているのかなというようなことも、だんだんわかってきました。

図1を少し説明すると(図の)左側を「形式知・科学的知」、右側を「暗黙知(どちらも哲学分野の用語です)」としました。それから、知識

ですね。ロゴスとパトスはよく言いますね。哲学でいうロジックとパッションでしょうか。論理性と情動ともいえると思います。日本的に言えば、「よく学び、よく遊べ」なんて言い方をされていますね。人工と自然、経験と体験。いろんな分野でその対峙があつて、例えば科学と宗教なんていうものは、土俵は一緒なんですよ。科学も宗教も真理を追求するという点では一緒なのですが、追究する手段だったり、仕方(方法)が違ふんですね。そう考えると、両方バランスをとってやらないといけないんだなという気がしてきます。こういうことをバランスよくやっていくのが野外教育なんだと私は考えています。

に対して理解・納得。間接体験に対し直接体験、客観的に対し主観的。科学に対しては芸術・宗教。論理とか記号といったものに対してはイメージ・感性でしょうか。左脳と右脳は話題になりましたね。IQとEQ。デジタルとアナログ。大脳新皮質は脳の表面の部分で(進化の過程で)後から人間が獲得してきた部分です。それよりもっと真ん中の部分で昔からの古い脳が大脳辺縁系

体験したことを学びに変えるということ、「ふり返し」なんて言い方をしますけど、それは体験を通して(図1の)右側で学んだ「知」を、左側の「知」に変換する行為であると思います。体験学習法で「サイクルをまわす」って言い方をしますが、それも、こうした右の部分で左の部分にまわしていく作業であるといえます。

さて、(図1の)左側の部分はどちらかといえば、教科書なんかで教えるやすい分野、文字や紙などで効率よく伝えられる(教えられる)部分。しかし、右側はなかなか教科書では教えるにいく伝えない部分になるのではないのでしょうか。

私はこれを分離させるのではなくて、グラデーションのように上手くつなげた関係において学習・学びを考えていけばいいのではないかと考えています。

例えば、ロックスクライミングやアウトワード・バウンド・スクール(OBS)などの冒険活動は典型的な自然の中での体験になりますが、もう少し人工的な要素を加えると(人工的な用具を使うと)、プロジェクトアドベンチャー(PA)などになる。もっと人工的な要素を入れると体育館の中で何か(ゲームなどを)するとかになってくる。あるいは、自然の側から(順に)見ていくと、オオカミがいて、それが家畜としての犬がいて、玩具としての(犬の)ぬいぐるみがある。最近ではロボット犬なんかも登場しました。

○教えられること

教えられること

そういった自然的なものと人工的なものとのグラデーション的なつながりの中で考えていけばいいのではないかと考えています。

教科書あるいは教室で教えられることと、そこでは教えられないこと。教えるにいくことがありますがね。科学的な思考と感情的な思考の違いといったものでしょうか。

少し例をあげると、先生が子どもたちに「雪が溶けるとどうなりますか?」と問いかけました。ほとんどの子は理科で教えてもらったとおり「水になる」と答えたのですが、ある子が「春になる」って答えたそうです。それで、その「春になる」って答えた子に「その答えは間違っているよ」って言うてもいいかどうか。これは随分話題になったんですが、雪が溶けたら水になるという科学的な思考は、簡単に「教室(教科書)」で伝えることができるけれども、春になるっていう感情的・情動的なもの(思考)は、なかなか「教室(教科書)」で教えるということとは難しいんですね。体験を通してでないと伝えることができないのだと思いますね。「ここに○○という花が咲いている」ということ(科学的な思考)と、「ああ、きれいな花が咲いている!」ということ(感情的な思考)との違いがあるような気がします。教室で教えられることと「体験」を通してでないと

教えられないことがあるのだと思いますね。

○体験を通して「わかる」ということは…

体験を通して「わかる」というのは、体験して得られた「暗黙知」、言葉ではなかなか説明しにくい「知」を、科学的な「形式知」、誰もが理解できる言葉とか文字に変換すること、それが体験を通して「わかる」ということであり、「本物の学び」となるのだと思います。

(体験を通しての) 学びの過程で「ふり返り」ということをします。「ふり返り」のプロセスというのは、体験を通して得られたもの「暗黙知」(それは自分ではわかっているんだけど、うまく言葉(文字)として表せないもの)を、みんなで話し合っているうちにお互いがわかり合えるようなもの「形式知」にしていこうと。それを「概念化」といいますが、そういうプロセスが「ふり返り」ということになります。

先程から説明してきたように、(図1の) 右側と左側の行き来というの、概念として知っていることを、体験を通して「からだで理解する」「わかる」という行為であり、また、自分で体験したことの意味を言語化して「知識として理解する」という行為であると思っています。

○鮎釣り

子どもの頃、きれいな川の近くで育ったという話をしましたが、その

川に都会から鮎釣りにたくさんの人があるんですね。都会から来た釣り人は、全身フル装備で数十万円するような用具とウェアを着て、鮎釣りをするんです。ところが(鮎が)絶対いないところでおとりの鮎を泳がせているんですね。一時間も二時間も。鮎は縄張りを作りますから、いる場所とない場所があります。私には、そこには鮎はいないってことがわかるので、「あんないい釣り竿を持ってフル装備しているのに、何で鮎がいないところにおとりを入れて一時間も二時間もじっと頑張っているのかな」と子どもながらに不思議でしかたがなかったです。その人は、鮎釣りについているのはどうすればいいのかわかっているんですが、どこに鮎がいるのかわかっているわけですね。

(私たちが) 橋の上から見ると、川の中には鮎が泳いでいたりヤマメが泳いでいたりするのがわかるのですが、(私は誰でも鮎やヤマメが泳いでいるのは見えても思っていたのですが) 都会の人が来て、私ら地元の子どもに「鮎はいるかい?」と聞いてくる。「いつばいいよ。ほらあそこにも…」と言っても、その人は「どこ、どこ?」とまったく見えないうんですね。私ら子どもには見えているんだけど、その人たちには見えないものがあるんだなあなんて思っていました。

今になるとわかりますが、そういったものは「自然認識力」の差だと思っんですね。見えているけど見

えていない、目に映ってはいないけど見えていないっていうものはたくさんある。そして、その力は体験を通さないと獲得することが難しいものではないでしょうか。

○アウトドアの本質と自然の関わり

これからの自然体験活動のポイントを、アウトドアの本質と自然の関わりということから考えてみたいと思います。

人間が進化のプロセスで得てきたもの(獲得してきたもの)あるいは、その時に獲得しながら学んできたものとか、それを得た喜びというもの、アウトドアのプログラムと大きな関わりを持っているように思えます。(人間の持つっているその本質的なものと非常に関わっていると思います)

人間は、ある時点で、意識や想像力(道具と智慧)といったものを身につけ、大地(自然)と深く関わって(食べたり働いたりして)生きてきました。それはすごく単純なプロセスなのですが、その単純なことが見えていないように思います。単純なことなのですが、「からだ(体験)」としてわかっているように思っています。

○名詞・動詞・形容詞

人間(子どもたち)は、発達の過程でまず名詞を覚え、次に動詞を覚えて、そして形容詞を覚えるといわれます。「物概念」といいますが、子

どもが言葉を覚えていく時に、例えば、キャベツならキャベツ、レタスならレタスといったそのものの言葉(名前)をまず覚えます。しかし、本当にそのものの概念ができるためには、体験を通してそのものが持つている属性(そのものの本質)が統合されて、はじめてキャベツとなる(物概念が形成される)わけです。だから、体験を通さないと知識(そのものの名前)だけを覚えてしまうとキャベツがキャベツとして実感されないということが起こってしまう、私のゼミの学生のような「キャベツとレタスの見分けがつかない」ということになるのだと思いますね。

体験を通してあるものの概念(物概念)ができて、それに時間とか空間が関わるような概念(「する」とか「動く」といった動詞で表現できるような概念)が形成され、さらに価値観的な概念(「美しい」とか「すばらしい」といった形容詞で表現できる概念)が加わっていくんですね。名詞→動詞→形容詞というような発展(過程)があるとすると、体験を通して学びの過程も、そのものの名前がわかって、それが体験することや活動の中で自覚されて、さらに価値を備えたものになっていくというような形で考えていけばいいのかなと思います。

○行動欲求から見た自然体験のプログラム

そこで、自然体験活動の意味Ⅱ人が自然の中(アウトドア)へ行って

活動する理由として思いつくものを「動詞」で表現してみました。その動詞で表現したもの、それを人が自然の中に行く「行動欲求」として捉え、それぞれの行動欲求に対応する自然体験のプログラムを考えると、図2に示した7つに分けられるかなと思います。

1つは身体活動系としたのですが、冒険（いどむ）、競争（きそう）、運動・健康（うごく・あるく）といった欲求に対してのプログラムです。

後で述べますが、一般の人たちの中には、アウトドアに「癒し」を求めて行く人たちもいます。こういう人たちにはこうした（身体活動系の）プログラムを提供してしまうとアウトドアそのものが嫌いになってしまいい、二度と自然の中に行かなくなってしまうかも知れませんね。その人たちがどんな欲求を持っているかというのと提供するプログラムをマッチアップさせることが非常に大事なことになると思います。

2つ目は作業系（収穫や作業、採集への欲求）のプログラムとしました。作業（働く）、収穫・狩猟（とる）といったプログラムです。

昭和30年代には、こういうプログラムは成り立たないですよ。これらそのものが「日常の生活」でありできればこういったことは避けたいとすら思われたものの、今は（わざわざ）お金を出してでもこういうことをやりにいく人がたくさんいる。時代が変わったんですね。

3つ目はレクリエーション系（娯

楽・遊び・生活・コミュニケーションへの欲求）です。娯楽（あそび）、体験（やってみる）、生活（すくすくらす）、仲間（出会う）といったプログラムですが、これなんかも、子どもたちにはすごく大事なことでと思います。思いつきり体を使って遊びまわる、うんと楽しむということとは本当に大事だと思います。

それから、クッキング系（調理や火を扱うことへの欲求）。料理・火（たべる）のプログラムですが、これは人間にとって根元的なものなのでしょね。

子どもたちと長年つき合っていますが、子どもたちが絶対やめない遊びっていうのがあるんですね。それは「火遊び」や「水遊び」です。火を燃やしたり川なんかに行き行って遊ばせると子どもたちは一日中でも遊んでいます。子どもたちが火遊びや水遊びをずっと飽きずに遊べるっていうのは、（火や水は）常に変化するからなんですね。川遊びなんかは変化の極致ですよ、あらゆるものが絶えず変化しているからずっと飽きずにいられるのでしょ。そう考えると、川原でバーベキューをするなんて、最高のプログラムで人氣があるのもわかります。火を扱って、水があつて、食べられるのですから。

5つ目はクラフト系・観賞系（創作や芸術、発見や鑑賞、科学的知への欲求）です。創作（つくる）、発見（みつける）鑑賞（みる）といったプログラムです。

1 冒険や競争・運動・健康への欲求（身体活動系）

冒険（いどむ）

ロッククライミング、冬季高所登山、極地探検など

競争（きそう）

山岳競技、競技スキー、フリークライミングなど野外活動を競技として行う活動

運動・健康（うごく・あるく）

ウォーキング、ハイキングなど歩く・走る・登ることに重きを置く活動

2 収穫や作業、採集への欲求

作業（働く）

間伐、森の手入れ、林業体験、田植え、稲刈り、農作業、収穫などの作業的活動

収穫・狩猟（とる）

フィッシング、山菜採り、きのこ狩り、昆虫採集など、採取、狩猟にかかる活動

3 娯楽・遊び・生活・コミュニケーションへの欲求

娯楽（あそび）

レクリエーション、ゲーム、遊ぶ活動

体験（やってみる）

初めての活動を体験してみる生活（すくすくらす）

キャンプ・アウトドア型の活動仲間（出会う）

仲間コミュニケーション

4 調理や火を扱うことへの欲求

料理・火（たべる）

野外料理、飯ごう炊飯、バーベキューなどクッキング（食）と火にかかわる活動

5 創作や芸術、発見や鑑賞、科学的知への欲求

創作（つくる）

各種のクラフト、絵画、詩歌、音楽など有形無形の創作・芸術にかかわる活動

発見（みつける）

自然、天体、野鳥、生物観察、など発見や感動・科学的探求などにかかわる活動

鑑賞（みる）

花見、紅葉狩り、夜間登山とご来光、初日の出を見るなど見る（観る）ことにかかわる活動

6 感性や癒し、生き物への欲求

動物（触れる・育てる）

馬、牛、羊、イルカ、小動物など、生き物に触れる・飼育する活動

癒し・休養（いやす・やすむ）

森林浴、リラククス、ストレス解消など、癒し・休養・治療的活動

感性（あじわう）

五感を使って自然に直接触れる活動、感性を刺激する活動

7 宗教や学び、洞察など精神領域の欲求

精神（考える）

自己発見、自然との対話、ダイープエコロジーなど精神領域にかかわる活動

宗教（あがめる・うやまう）

信仰登山、講中登山など宗教的欲求や信仰に結びついた活動

学習（学ぶ）

研修や講習などスキルアップや学びを目的とした活動

【図2】行動欲求から見た自然体験のプログラム

それから(先ほど少し話した)癒し系(感性や癒し、生き物への欲求)ですね。生き物(触れる・育てる)、癒し・休養(いやす・やすむ)、感性(あじわう)といったプログラムです。

7つ目は宗教や学び、洞察などの精神領域の欲求を満足させるようなプログラムですね。環境教育なんかもここに入ると思うのですが、環境教育などの今日的課題に対応したプログラムの充実についても、これから考えていかなければならないなと思っています。

○自然体験活動にかかわる指導者に求められるもの

自然体験活動に関わる指導者に求められるものについてですが、以前はアウトドア(自然体験)というのは趣味としてであったり、好きでやっているのだから:というところがありました。しかし、最近では、(学校の先生はもちろんそうなのですが)一般のボランティアとして関わる人たちも、指導者として見られますから、趣味からの脱皮¹¹指導者なんだということを考えていかなければならないと思います。

自然体験を指導する指導者として、「自然体験をどう捉えるか」ということは非常に大事なことだと思えますね。自分なりに自然体験とかキャンプだとかに対して、自分なりの考え方を持っておいた方がいいと思います。ただやらせるということだけじゃなくて、この活動はこうい

うことに良いからこの体験をしよう、この活動にはこういう効果があるからこの活動をやる意味があるんだというものを、しっかりと持つべきだと思います。

キャンプの事前オリエンテーションなどで、「キャンプっていいですよ」と話をした時、「どこがいいのか、どこが面白いのか」「なぜいいのか」といった質問が出ます。その質問に対して、説明できるような自分なりの捉え方・考え方を持っておくべきだろうと思います。

ところが、この自然体験の良さを説明するということは難しいんですね。(先に話したように)自分ではわかっているけど言葉ににくいもの(「暗黙知」)をたくさん扱う分野ですから、それを形式的に表現するというのは非常に難しいことなのです。しかし、それでもそういうものを自分なりに持って伝えていかないと、社会一般にはなかなかこの分野の重要性というものは伝わりにくいと思いますね。

○体験活動(野外教育)の教育的効果

野外教育の教育的効果については、いろんな研究がされています。研究で実証されたものを私なりにまとめると、達成動機の向上、有能感の向上、自律心の向上、他者受容感・凝集性の向上、自己決定感の向上、自然意識・感性の向上、そして、道徳心・正義感・生きる力の向上の7つくらいになります。

達成動機とは「やる気」のことで、有能感とは「自信」がつくこと。自律心には「がまん」「責任」といったものが含まれます。これらはすべて今の子どもたちに大切だとされているものばかりですね。

それから他者受容感・凝集性は、「まとまりの度合いが高まる」「仲間意識が強くなる」ことで友達ができていくことになります。自己決定感の向上は、自分で「判断」することができるようになること。自然意識・感性は自然への気づきが身につくことになります。

このような体験活動(野外教育)の教育効果は、(ここ二十数年のことですが)多くの人たちによって調査・研究され、実証されてきました。

○体験活動の指導者に求められる能力(指導法)

効果を引き出すための重要なポイントのひとつにその指導法があります。上手に動機づけをすることも必要です。それから、参加者の内部体験を上手に引き出すことが大切になってきます。(先ほど話した)体験したことを学びに変えるということなのですが、この本人が体験して持っている内部体験を引き出すというのは、なかなか難しいことですね。活動がやりつ放しになっていないか(チェックする必要があります)。

最近、「ふり返り」ということがよく言われていますが、無理矢理ふり返りをさせても、それではふり返りにはなりません。本当に体験させたこ

とを上手に学びに変えたり評価するのは難しいですね。

野外活動とか自然体験活動の指導者に求められるものというのは、(時代に応じて変わっていくものではありますが)時代に応じて変えていかなければならない部分と時代を越えて伝えていかなければならない部分というのがあると思います。

私たちがアウトドアに関わり始めた1970年代は、例えば、キャンプの指導では、テント設営とか火おこしの仕方という、いわゆるインストラクション(技術の指導)が主だったと思いますが、時代の流れとともに、いろんなことが求められるようになってきました。

最近、求められるようになってきたものには、インタープリテーション(環境・自然の解説能力)だとか、ファシリテーション(調整能力)、カウンセリング(参加者への支援や掌握能力)などがあります。単に自然体験活動の技術を伝えるだけではなく、なってきたりいますね。いろんな問題を抱えている子どもが(自然体験活動に)来るようになってきたから、その子たちの話を聞いてやる能力や対応できる能力、あるいは、グループの調整能力が必要になってきました。集団として子どもたちをどうやって見ていくかといった力はファシリテーションの能力ですね。それから、自然学校のような施設の職員には、地域(地域の人的資源や関係団体)とのコーディネート能力や企画力、リスクマネジメント

トを含めたマネジメントの能力、適切な指導法（指導力）といったものが要求されるようになってきましたね。

それから、体験学習法（学校教育における体験学習と野外活動の分野でされる体験学習とは少し違うとは思いますが）も最近用いられている指導法のひとつですね。

体験したこと（やってみたこと）をふり返り、考え、分析することで概念化する（仮説化する）。この過程をサイクルとする学習法、指導法ですが、野外活動の分野でも最近よく用いられるようになりました。しかし、先ほど述べたように、ただ「ふり返り」をすればいいというものではなく、体験したことを学びに変えること、そのことで意識が変わり、行動変容が起ることにつながっていくかなければならないと思っています。

○体験活動の効果を引き出す要因

先ほど、体験活動の効果（実証できているもの）を7つほどあげましたが、その効果を引き出す（もたらす）要因について考えたいと思います。

ただ、「その人が本当に何がきっかけで、そうした効果が出たのか」という原因（要因）を分析するというのは難しいことなのですが、このことが大きな影響を与えているであろうということをも4つほどあげてみます。

1つ目は、『活動プログラムの中にグループで何かを成し遂げたり解決したりする場面があること』です。何かを成し遂げる、しかもグループ（集団）で成し遂げるといった体験は、最近の子どもたちには随分少なくなっています。集団で何かを成し遂げることによって個人が変容していくことはよくありますね。例えば、私のゼミの学生を雪の中に連れて行って、みんなと一緒に弁当を食べる。（なかなか得難い体験なんです）そんな体験を一回でもすると、この集団はあつという間に仲良くなります。集団が個人を変容させていく良い例ではないかと思っています。

2つ目の要因としては、『苦しいことやたいへんなことに自分でチャレンジして、成功する場面があること』です。これは（効果をあげる要因として）大きいですね。キャンプでロッククライミングなんかをしたります。ほんの一日の活動（体験）なのですが、学生たちの表情が違ってきてますね。とてもいい顔をしています。こういう体験というのは、1つ目の要因とも関連しますが、集団での活動が個人を成長させることになると思います。

3つ目は、やっぱり「本物の体験」ということですが、『自然の中で本物の自然や自然物に直接触れる機会があること』です。本物を体験するというのは、本当に大きな要因だと思います。プラネタリウムではなく、満天の星空を眺める体験が大切だと

いうことではないでしょうか。

それから4つ目は（私はこれが一番大事だと思うのですが）、『状況を把握し、支援ができる指導者が介在すること』です。本物の自然を体験させることもすごく大事なことのようですが、（体験した）子どもたちのよい良い変容をもたらすためには、子どもたちが体験している場面、状況を把握し、支援できる指導者が介在しているかどうかということが大きいと思います。同じような条件（日数、場所、内容）で実施したキャンプでも、あるキャンプは非常に効果があがっているが、あるキャンプはあまり効果があがっていないということがあります。これにはいろんな原因（要因）があるとは思いますが、きちんと指導できる指導者が介在しているかないか、勿論、（子どもたちにとって）体験だけでも、ものすごく意味のある（効果のある）プログラムなのですが、そういう状況を把握し、支援ができる指導者がいるかないかということが非常に大きいんですね。

つまりは、やっぱり「人」ということでしょうか。自然の中での体験を通して学ぶ時、そこにある「自然」と「人（仲間）」がその人を成長させるのだと思います。

○おわりに

今日は、『体験を通しての学びの意味』ということ話をしてきました。子どもたちは自然の中で様々な体験をするわけですが、それを「学び」

として見た時に、野外教育（野外活動）というのはどういう意味を持っているのか、自然体験活動を指導する上で求められていること（要求されていること）にはどのようなものがあるのかといったことについて（それに対してどのような研究がなされ実証されてきたかなども含め）話をさせていただきました。

実際に学校教育の現場でこういった「学び」をどのように生かしているのか、今の子どもたちにどう対応したらいいのかなどについては、この後のシンポジウムで討論されると思いますので、そちらに譲りたいと思います。

今日は貴重な場を提供いただき、本当にありがとうございます。これで私の講演を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

※基調講演の後半部では、星野先生が作成された野外活動（野外教育）の歴史と今日的課題についてご講演いただきましたが、紙面の都合上、割愛させていただきます。

なお、本校の機関紙どんぐり46/40にも星野先生の提言を掲載しています。



シンポジウム

『自然学校・体験活動の
教育的効果・可能性を探る』



井 浩 彰
井 義 維
野 直 氏
吉 氏

高見 関西国際大学から参りました高見といいます。普段はス

平野 皆さんこんにちは。それではシンポジウムを開催させていただきます。司会進行をさせていただきます。平野と申します。長野市の善光寺というお寺のすぐ近くにある信州大学教育学部から参りました。大学では、「野外教育」の専攻分野を主に担当しています。

それでは、シンポジストの先生方に、自己紹介と今日はこんな話をするといいことを端的にまとめてご発言をお願いします。最初に高見先生からよろしくお願いします。

シンポジスト
関西国際大学教授 高見 彰
淑徳大学教授 土井 浩信
千葉県立大房岬少年自然の家所長 桜井義維英
コーディネーター
信州大学教授 平野 吉直
(敬称略)

平野 土井先生が筑波大学附属小学校に勤務されていた頃、私は学生でした。それで、土井先生のお手伝いに何度も足を運ばせていただきました。そのあたりのお話であるとか最近では障害のある方々や子どもたちのキャンプなども実践されて

土井 こんにちは。淑徳大学の土井です。淑徳大学は、社会福祉系の学部の中で野外教育のゼミがある唯一の大学です。今回、私がここに呼ばれた理由は淑徳大学の前に筑波大学の附属小学校で教員をやっていたので、恐らくそこでのいろんな体験を話してくださいということだろうと思っています。そこで実践してきたことを野外教育との関連も含めて、お話しできればと思っています。

平野 ありがとうございます。登壇している者の中では、一番兵庫県の自然学校に詳しい先生ですので、実態や課題を含めながらお話をいただきたいと思っています。続きまして淑徳大学の土井先生、お願いします。

ボーツ関連の教員をしているのですが、縁があつて自然体験やキャンプに関わっています。南但馬自然学校の調査研究委員会の委員もしていますので、今日は平成15・16年度にかけて調査しました調査結果をもとに兵庫県の自然学校から見えてくるもの、特に子どもたちにとってどういう教育効果をもたらしているかということについて話をしたいと思っています。

高見 先生には、(兵庫の)5泊6日の自然学校を実施する上で、どのようなことに留意していく必要があるのかといった観点で問題提起をしていただきたいと思います。

今日のシンポジウムの流れは、まず、それぞれの専門分野から自然学校・体験活動の教育的な効果や可能性を探るというテーマで、お話をいただきますと思っています。

平野 県立の施設も含めそのほとんどの学校教員で運営していた全国の少年自然の家・青年の家が、民間に運営委託をするようになってきました。民間でありながら子どもたちを受け入れられている立場から、私たちにはない視点からお話をいただきたいと思います。

桜井 はじめまして、桜井と申します。私は昨年9月に千葉県の南の端にある大房岬少年自然の家の指定管理者として運営委託され赴任しました。ですから、県立の施設でありながら、私は純粋な民間(の者)です。国際自然大学校を振り出しに自然体験活動推進協議会それから今の大房岬少年自然の家と渡り歩いていきます。今日は、恐らく民間がいかにして生き長らえるかということをお話ししてほしいということなんだろうなと思っています。

いますので、そのようなお話も聞かせていただければと思います。

では、千葉県立大房岬少年自然の家の桜井所長、よろしく申し上げます。

土井先生には、野外教育の良き手法や考え方をどのようにして学校教育に採り入れていけばいいのかという視点で問題提起をしていただきます。

桜井所長からは、自然学校で培った力や経験をその後の学校教育にどう生かしていったらいいのだろうか、自然学校・体験活動を単発に終わらせないで、どのように（その後に）生かしていくのかといった問題提起をしていただきたいとお願いをしています。

それでは、高見先生からよろしくお願いします。



高見

兵庫県の自然学校のもたらす教育的効果ということですが、ここで少し兵庫の自然学校を振り返ってみたい（確認したい）と思います。

（兵庫県の自然学校の特徴）

まず、兵庫県の自然学校の特徴としては、何と言っても（実施期間が）5泊6日、これを除いては語れないと思います。（一般的に）長くても3泊4日といった自然体験の学習（活動）が多い中で、兵庫県の5泊6日というのは、とび抜けた期間だと思

います。

長期宿泊型の体験学習ということですが、学校教育の中で行われているものとすれば5泊6日は秀逸ではないかと思っています。

この「5泊6日」というのは大きな数字になってくると思います。なぜ5泊6日なのかということについては、後半の問題提起で少しお話をさせていただきます。

それから、兵庫県の自然学校の特徴として、自然学校をサポートしている指導補助員の存在があります。これも大きな特徴だと思います。

（6、7年前の調査では）8割強の小学校が自然学校に指導補助員を雇い入れています。教職員以外の人間が子どもに関わるということ、これも他にはない制度になっていると思っています。そして、その指導補助員が、（子どもたちと）教員とのパイプ役になっている。（調査からも、指導補助員の）約7割が子どもたちの生活面やプログラムをサポートしています。但し、それだけの需要に対して、指導補助員がそれに応えるだけの力を持っているかということが問題で、これについても後の問題提起のところで述べたいと思っています。

3つ目の特徴として、（自然学校を）南但馬自然学校などの県立施設や各市町の持っている施設を使って実施する学校が多いことや県からの補助もあるため、非常に安い経費で行うことができ、保護者の（経済的）負担が少ないということも他の府県で行われている体験学習活動にない

特徴になっていると思います。この三つが大きな特徴であると思います。

（データから見る自然学校）

平成15・16年に南但馬自然学校の調査研究委員会でもとめた調査結果から抜粋したデータです。これは平成8年に行った調査と全く同じ項目を平成15年に行い、その差異を検証することを目的として行われた調査です。

調査結果を見ていくと、（これは当たり前のことですが）自然学校を体験している児童は、ほぼ100%に近い（99.4%）。県下の小学校5年生のほぼ全員が、同じ時期（学年）に5泊6日の体験活動という共通体験をしている。これはものすごいことではないかと思えます。これだけ多くの子どもたちに影響を与えることを考えると、自然学校の内容や取り組みを真剣に考えなければならぬことも押さえておきたいと思えます。どんな体験をさせるかで、プラスのインパクトを与える体験ともなるし、逆にそうではない体験となってしまう可能性もあるわけです。

次に、子どもたちが自然学校に対してどんな期待（楽しみにしている）を持ち、どんな満足（楽しかった）を得たのかということについて見てみると、実施前、86%の子どもたちが「楽しみにしている」と答えています。（53%が「あまり楽しみでない」、9%が「どちらでもない」と回答）9割近くの子どもたちが自然学校に期待している。また、実施後の「楽しかったか」という問いにも、ほぼ同数の子どもたちが「楽しかった」と答えていて、期待していたと

おりの効果を子どもたちに与えられているのではないかといいことがうかがえます。

「どんなことを楽しみにしていたか」ということについては、まず、どんな活動をするのかという活動の内容そのものを楽しみにしているということがあります。それから、みんなと一緒に共同生活ができる（一緒に活動できる）ということを楽しみにしているということもあります。また、実施後の「どんなことが楽しかったか」という問いに対しても、やはり「楽しみにしていたこと」と同じように、「その活動（そのもの）」が楽しかった「や」「友達と仲良く生活（活動）できた」ということを理由にあげている子どもたちが多くいました。

子どもたちは、期待していたこと（楽しみにしていたこと）を自然学校の中では（期待どおりに）体験しているということだと思えます。一方、楽しくなかった理由については、「活動がしんどかった」、「友達とうまくいかなかった」などが16年度の調査でも出てきていますが、これらは楽しかった理由の全くの裏返しです。ということは、自然学校で子どもたちに満足感を与えるためには、まず活動がきちんとできているということと友達関係（人間関係）がうまくいっていることが重要だということになりますね。

自然学校での感動（体験）について見てみると、平成8年度では63%、平成16年度では53%と半数以上の子どもたちが、自然学校で何らかの感動体験をしていることがわかります。

ただ、感動（体験）がなかった子どもたちも半数近くいるわけですから（感動体験については）自然学校の中で二分化していると言えます。

具体的に、どんな時にどんなところで感動したかについては、キャンプファイヤーが圧倒的に多いです。その他には、登山・ハイキング、ナイトハイク、野外炊飯、自然（の美しさ）といったものが上位にきます。どの活動も非日常的なものであり、学校や家庭ではなかなかできない体験をしたときに感動（体験）と結びついていると言えます。

感動した理由については、（感動した場面と対応して）「仲間と助け合いができた」、「最後まで頑張ることができた」、「自然が美しかった」といったものがあげられます。

次に、自然学校実施後の日常生活の中で、「自然学校で体験したことが現在も続いていますか（継続していますか）」という質問に対しての答えです。23%の子どもたちが自然学校で得たものを（実施後の）日常生活でも続けていると答えています。ということとは、あとの77%ぐらいの子どもたちは、自然学校から帰ってきたらせっかく自然学校で身につけたものがなくなってしまうというところがあるわけですね。（この数字が多いか少ないかについては議論するところがあると思います）が、自然学校で良い体験をするのだから、日常生活に戻るとその体験（自然学校で得たもの）が持続しない。何とかそれを継続させていくためのフォロー（手だて）がないのかなというようなことを思っています。

最後に保護者に対するアンケート調査結果ですが、保護者としては「自然学校に行かせて（体験させて）良かったか」という問いに対して、98%の保護者が子どもを自然学校に行かせて良かったと答えています。

理由としては、日常生活で体験させることができないことを体験させることができた、保護者のもとを離れて集団生活をする中で自主性や協調性が養えたといったことがあげられます。

自然学校は、子どもたちに良い効果をもたらすことがたくさんあるのですが、実施後にそれを継続していくこと（発展させていくこと）など、自然学校を充実させていくために考えていかなければならない課題も多いということを含めて話をしたいと思います。

平野 ありがとうございます。続いて、土井先生お願いします。



土井 私からは、（自己紹介でも申しました）が、私が筑波大学附属小学校の教諭時代にやってきた「ある程度、理想的な形で展開することができた」と思える体験活動

の事例について話をしたいと思っています。

【筑波大学附属小学校の野外体験活動の特徴】

筑波大学附属小学校は、まさに都心のご真ん中にあるのですが、山梨県の清里に（PTAが持っている）大きな野外施設があります。それが自然学校みたいなものなのですが、広大な自然の中に宿泊施設やキャンプ場があります。そこに3年生から6年生の4年間に4回、「清里合宿」として学級単位で3泊4日の体験活動を実施しています。

（スタッフは）担任と担任以外の教員が一人、ついていきます。私が赴任した当時は、保護者の方も（8人くらい）お手伝いという形で来られていました。が、せっかく筑波大学には野外教育を専門にやっている講座があるのだから、その学生たちに指導に来てもらう（指導の場を与える）のがいいのではということ、その体制を整えてもらいました。

『清里合宿』の大きな特徴は、（そこでやるプログラムを）担任が自由に考えられるということです。どの学級も同じことをやりましょうというわけではないわけです。担任の思いやこういう心を育てたいということ、プログラム化していくことが可能なのです。

そして、そのプログラムで子どもたちは自主的に活動することになります。例えば、グループ単位で（子どもたちだけで）登山をする、グループの代表が「先生、私たちは〇〇という行程で、〇時までに山頂に行きます」と言ってくる。担任は「よ

し、この計画で行ってこい！」「これはちょっと難しいな、これだと頂上に行けないかもしれないぞ」とチェックやアドバイスをします。子どもたちが山に向かったら、担任（スタッフ）は子どもたちが通りそうなポイントに立って見守るだけです。子どもたちは自分たちで地図やコンパスを見ながら登山をして、また施設まで帰ってくる。（安全面からすると）学校ではちょっと考えられないプログラムかも知れませんが、なぜそういったプログラムを（リスクを負ってでも）するかというと、子どもたちが自分たちで自分たちの活動として取り組まない限り、どんなに素晴らしいプログラムであって面白くはない。（教師から）与えられたものの指示されたものは、教師に言われたからやったことに過ぎない。ところが、自分たちで考えたり、どうしても自分たちで解決しなければならなくなると、グループ全体がいろいろと話し合っていきます。その過程で何が生まれてくるかというと、（容易に想像できると思いますが）ものすごく大きな凝集性が生まれ、グループ・学級全体の構成員が高まっていきます。たったひとつの活動を体験するだけでもそれくらいの効果が出ます。それを4年間やっていくわけですから、子どもたちにはものすごい力を身につけることになり

ますね。この『清里合宿』は、当然、学校行事として実施していますから、学校教育の流れ（カリキュラム）の中に組み込まれています。ですから、子どもたちは（体験活動に）行く前

からどんな活動をどんなねらいでするのか、どんな体験をするのかということがわかっていきます。子どもたちは主体的に準備に取りかかります。グループ分けや実施後の「ふり返し」をどうするかということまで子どもたちが考えることもあります。実施期間中だけでなく、実施前から実施中、実施後という一連の流れの中で考えられていて、学校教育のカリキュラムの中にしっかりと位置付けられているわけです。このような形で自然体験活動というものがなされていくということは、一般的にはかなり難しいことなんだろうと思いますね。

それから、実施単位が40人というグループ、学級単位ということも大きい。(この40という数は重要で)40人を超えると、子どもたちは集団の中に埋没してしまい、自分のこととして考えないようになり、教育効果は非常に薄いものとなってしまいます。しかし、40人くらいの集団(グループ)だと、子どもたちは自然に自分の居場所を感じたり、あるいは自分が何らかの形で「この集団を構成している一人なんだ」という意識を(無意識のうちに)持ちます。そうすると、教師と子どもたちの距離がものすごく近くなり、いろんなコミュニケーションが取れるようになるわけです。グループ(集団)全体の人数構成、集団の規模という面から考えて、これはひとつの理想的な規模(数)だと思います。

以前、大学生を対象とした調査をした時のことなのですが、ほとんどの大学生が小学校の頃に自然体験活

動をやっています。それで、どんな思い出があるか調査したのですが、私たちが期待しているような自然体験のいろんな部分の思い出はほとんど出てこないのです。先生の目を盗んでいろんなことをやったとかいうのはおもしろおかしく語ってくれるのですが、自然のすばらしさに触れたとか、友達のいろんな面を発見して感動したといったことは出てこない。非常に残念でした。

そう考えると改めて、「筑波大学附属小学校の(体験活動の)システム」というものが本当にすごいものだったんだな」と、今、振り返ってみてもそう思います。こうした(清里合宿のような)体験活動の(教育的)効果の大きさを考えていただき是非、そんな体験活動にチャレンジして(取り組んで)いただければなと思います。

平野 どうもありがとうございます。続いて、桜井所長よろしくお願いします。



桜井 私は現場一筋でできているものですから、とても情緒的な話をしてしまうかもしれませんが、二

つほどお話ししようと思います。

【提供したいものと提供してほしいもののマッチング】

今、子どもたちにいい体験活動をさせようと思つて一番必死になっているのは、一次産業の関係者、農業関係者です。

それは何故か。二つ理由があります。一つは子どもたちを育てるには自然体験をさせるのが有効なことだが、自然体験をさせてやれるのは俺たちのところじゃないかという思いと、もう一つは、(自分たちの産業の)後継者を育てたいという思いから一生懸命やっているのです。

しかし、残念なことにこの農林漁業関係者は、人にものを伝えるというノウハウを持っていません。これを持つているのは教育関係者です。

それならば、この2つのグループが融合したらどういうものができるのだろうかということを考えています。それを考えるときに重要になるのが、(自然体験活動の)指導者が提供したいと思つているものと(参加者・利用者が)提供してほしいと思つているものがしっかりとマッチングしているかということです。

先程、高見先生のお話にもありましたが、保護者は自然学校で協調性だとか友達とのつき合い方を学んでほしいと期待している。しかし、(指導する側の)農林漁業関係の人たちにはそんなことはあまり考えてなくて「農業のことを教えない。林業のことを教えない」となるわけです。そうすると、子どもたちにとつてその体験は、ちよつとつまらないものになってしまう。子どもたちが

保護者が求めているものと上手にマッチングできていないのです。

プログラムが体験だけになってしまふのではなく、(そのプログラムで)子どもたちに何を感じさせて、どうなつてほしいかというマッチングができていなければならない。例えば、子どもたちが農業体験をした結果として、友だちと仲良くなれたとか協調性が身についたということが提供できていなければならないのです。

そのマッチングがしっかりとできるようにするには、(指導者と参加者の)お互いが求めているものと提供しなければならぬものを考え、手をつながなければならぬ人と手をつなぐ(連携する)ということが必要だということです。

【コスト意識と幕ノ内弁当】

もう一つ話したいのはですね。これは民間だから言えることなんですけれども、コストの問題です。自然体験活動に子どもたちがやって来るわけですが、この子どもたちはいくらか払ってきているんだろうということを考えてください。先程、参加費は限りなく無料に近いと言う話もありました。確かに参加費は無料に近いかも知れないが(指導者の)人件費が掛かっています。その人件費は(税金から支払われていますから)その子どもたちの親が払っていることになりますよね。年収500万円の指導者には、一日当たり1万5千円のコストが掛かっていることになる。10人の指導者がいたら15万円が一日当たりのコストとして掛かっている。子どもたちが30人参加したとしたら、

一人当たり5千円(の件費)を払っている計算になりますね。

そう考えた時に、指導者(提供者)のコスト意識があまりにも無過ぎると思います。計算するとかかなりのコストが掛かっているが、それに見合ったものを提供できているか、皆さんがそのお金を払うとしたらそれで満足できるか。それだけのサービスを提供しているかどうか。(私自身もそれを問い返さなければならぬのですが)それをきちんと認識するべきだと思います。

そうは言っても、参加者、利用者の要求するものだけを提供するのは良くない。林業体験などはあまり評判はよくないけどもやらせなくてはいいのいかも知れない。

そのことについて、私は『幕ノ内弁当論』って言っているのですけれど、幕ノ内弁当があるとします。小さい子どもは最初に何を食べるかというと、(大人なら最後に食べるそう)デザート用の饅頭とか否んかを食べます。焼き魚とかはほとんど食べない。(無理やり食べさせられることになったりもする)しかし、歳をとってくると焼き魚とかに最初に手がでる。年齢とともに箸を付ける順番も違ってくるし、好みは変わってくるわけですよ。

自然体験を幕ノ内弁当に喩えた時必ずついているご飯に相当するものが宿泊でしょう。宿泊っていうのがご飯です。これがメインになる。それにいろいろなおかずがついてくる。鳥の唐揚げなんていうのはたぶんキャンプファイヤーでしょう。どの世代でもいつでも人気のある不朽の

定番ですよ。そこに地方によっていろんなメニューがあつていろんなおかずがついてくる。それでいいと思います。

では、なぜ「幕ノ内弁当を食べようかな」と思うのか。それはいろんなものがみんなおいしく食べられるからですよ。幕ノ内弁当っていうのは、一つのおかずの味を突出させると他のもののおいしくなくなるからそれぞれのおかずの味付けは濃くないけど、その味付けはきっちりしている。一つ一つのプログラムはそれほど目立たないが、それぞれがきちり仕込みがされていて、自然学校(自然体験)という一つの幕ノ内弁当になった時に、『おいしいなあ』と感じる。中には、うまくないなあと思うものや無理やり食べさせられるものがあつてもいいと思います。それでも一つ一つのおかずにはきちんと味が付いていて、バランスと調和がとれている。そんな幕ノ内弁当が作れるといいのではないかな。そうすると(自然学校に来てくれた子どもたちが)将来また自然体験してみようと思ってくれる。自然体験という幕ノ内弁当また食べようと思ってくれる。こんな人を育てることができれば、子どもの時の体験活動、自然学校は成功だと思えますね。

平野 はい、ありがとうございます。今、三人の方から本当に全く違う視点でお話をいただきました。

続いて、(今日のテーマでもある)自然学校・体験活動の教育的効果についてですが、兵庫県の自然学校を

イメージしながら、ご自身が、校長あるいは引率責任者だとしたら、こんなことが目指せるのではないかというところについてお話しただきたいと思っています。

土井 (自然学校・体験活動の)教育的効果というのは、活動をどう献立し、どう体験して、どう関わっていくのかということが大きな問題だと思います。

【ティーチャブルモメント】

例えば、自然の中に行けば、自然が大好きになつて自然に対する感性が溢れるような子どもになるかというとなんかありません。自然が豊かなところで生活している人がものすごく自然に対する感性が豊かであるということはありません。

ゴミのポイ捨ての問題についても、なぜ空き缶やタバコの吸い殻をポイッと捨ててしまうのか。「ポイ捨てはいいけない」ということはみんな知っています。星野先生の話にもあつたように、知識としては知っている。しかし、「捨てるなんてとんでもない。絶対に出来ませんよ。」という知り方はしていないのです。そのような知り方(理解の仕方)がどうやったら伝わるのかということが一番大事なポイントだろうなと思います。

体育の授業の二つの事例があります。マット運動のマットを片付ける時のことですが、「よし、今からマットを片付けるぞ。用意、始め!」と、ストッブウォッチでその時間を計り、「おお、今日は31秒で片付けること出来たな。良かったな、よしよ

し!」とする先生と、「さあ、これからマットを片付けるぞ。みんな一緒にやろう」と言つて、先生も一緒に片付け、「上手に片付けられた。(マットの)端が全部揃っていると本当に気持ちいいな!」と言う先生、さてどっちの先生が(方法が)いいのだろうか。時間を計りながら片付ける、掃除するということだけを効率よく展開していく子どもたち、いつでもどこでも自分一人でも片付けをする(掃除をする)というのはなんて清々しいんだろうというような心情が果たして伝わるでしょうか?、伝わらないですよ。ところが、そういうやり方で体験活動のプログラムが展開されていることがたくさんあるのです。

ハイキングに出発する。ハイキングコースを全部巡ってゴールすることだけに一生懸命になるやり方もありますが、コースの途中でクモがくもの巣を張り始めたのを発見して「おっ、くもの巣を張り始めたぞ。今日のハイキングは中止して、みんなこれを観察しよう!」とすべての計画を変更してでも、その瞬間を大事にした味わい方(体験の仕方)を果たしてやっているかどうか。そういうものを私たちは「ティーチャブルモメント(あることを教える・学ぶための最高の瞬間(機会))」と言っていますけれども、そのようなことを大事にしたやり方をしているかという、してないんですよ。カエルの産卵のまさにその瞬間に出くわす。野外炊飯をしている時にもものすごくきれいな夕焼けが広がっている。そんなティーチャブルモ

ントを大事にしていけることが重要なのです。その瞬間（機会）を大事にしていくと子どもたちに「思い出が残るんです。思い出というものは、例えば炊飯活動をしたから炊飯活動が思い出として残るのではなく、自分が関わってやったことのその瞬間（の感動）が思い出になるわけですよね。そういうようなことがあるかないかなのです。子どもたちに素晴らしい思い出を残すための関わりをしていくかということが重要だと思っています。

平野 ありがとうございます。では、桜井所長にも教育的効果についてと、（それから先程の話の中でも触れられていましたが）私たちがやっている体験活動を補助・支援してくれるのは、一方で若い学生たちであり、一方で手に技（技術）を持った（比較的高齢な）第一次産業に携わっている人たちになってくるのではないかと思います。そういう方々が自然体験活動に関わる意義といったものも合わせてお話しただきたいと思っています。

桜井 近年、スキーをする人が減っている。スキー人口の一番の層になるのは、若いお父さんお母さんの世代なのですが、この世代は修学旅行でスキーに行くということが盛んだった頃ですね。ちょっと乱暴な言い方をしますが、スキー修学旅行でスキーが嫌いになってしまい、スキー人口も減った。何が言いたいかというと、これも幕ノ内弁当の話なのです。「また来たいな」と思う、

「自然っていいなあ」と思うということが、そのスキー修学旅行には無かったのだらうと思いますね。

【自然学校も幕ノ内弁当】

小学校5年生の自然学校だったら、それも「幕ノ内弁当」であればそれでいいと思います。当然、協調性だとか仲間と仲良くなるということも必要ですが、これは横ピンタみたいなのなのです。4泊5泊かけてやったことでも、（高見先生の調査にもあったように）活動内容は忘れていってしまうのです。でも、「思い出」として残っていれば、「また（自然の中へ）行こう」と思う。その時には、前とは違った角度から友達と仲良くしようだとか、こういうことって大事だったよねと感じてくれる（思い出してくれる）。そういうことを繰り返ししていくためのモチベーションさえ作ることができれば、それで十分だと思うのです。勿論、ねらいにあげた協調性などもある程度は高めなければならぬとは思いますが、それを高めることや技術を伝えることに一生懸命になるあまり、その体験そのものを嫌いになってしまっただけは何の意味もないと思うのです。

楽しかったなという思い出、また来たいなという思いが残るようなプログラムを提供して、ねらいとしたものについては、ある程度の成果があればいいと思いますよ。

「いい思い出ができたでしょう……」それがいいんです。だから、（体験活動の）効果というのは、自然のことが好きになったり、こういう宿泊体験が好きになったりしてくれる子どもが

育つことそのものが効果（成果）なのだと思います。

【農林漁業従事者は無形文化財】

農林漁業関係者の話ですが、これもちょっと乱暴な言い方をしますと、私は「農林漁業従事者は無形文化財」と思っています。

ただ、そういう（農林漁業の）人たちというのは、自分のやっていることを子どもたちに伝えるのは下手なのです。なぜなら、普段の仕事の中で（自分のやっていることを）伝えるなんて状況はないわけですよ。だって、農業にしても林業にしても喋っていたら仕事にならない。漁業なんて一日中、海に出て黙って一人でやっている。そういう人たちに、上手く伝えるように喋ってくださーいというのはすごく難しいことなのです。

しかし、その人たちが持っている「伝統」だとか「知識（技能）」だとかいったものは、ものすごいものがある。だから私は、その人たちは無形文化財だと思うのです。

そこで、その文化財を子どもたちに伝えるには何が必要かというと、「解説者」が必要なんですよね。農林漁業者の人たちと解説者（インタープリター）とがセットで必要だと思っています。このインタープリターが学校の先生の場合もあるだろうし、補助指導員、あるいは私のような青少年教育施設の専門職員の場合もあるだろうが、そういうことができる人間が（その活動を）インタープリテーションしていくことが必要であると思います。また、（特に第

一次産業の体験は）そのまま体験だけをするのではなく、活動にちよつとした「ひねり」を加えて、活動をプログラム化する必要があると思います。

なぜ子どもたちに自然体験活動をさせる時に第一次産業との連携にこだわるかというと、私は、日本の自然というのは農林漁業を抜いては語ることができない、日本の自然環境はその多くが農林漁業に携わる人間の手が入って作られてきた環境なんじゃないかなと思っています。だからこそ、その関わりといったものを大事にしたいと考えています。

平野 時間も残り少なくなってきましたが、より充実した5泊6日の自然学校を実施していく上でどんなことに留意していく必要があるかについて、高見先生、お願いします。

高見 最初に話したように、県下の5年生が5泊6日の体験活動をするというのは、ものすごいチャンスなのです。ところが、その自然学校が一発の打ち上げ花火で終わってしまうのは、非常に寂しいと思います。

【小学校の教育課程全体で自然学校を考える】

学校の全ての行事が自然学校につながっていくというのはあり得ないことなのでしょうが、それでも、1年生の時から計画的に教育課程を組み、5年生の自然学校につなげていく。そうすると1年生の時にはこんなことを体験させたい、2年生では

こんなことを：それを踏まえて自然学校が（その集大成として）実施される。そして6年生になって卒業する時に、小学校生活の中での自然学校を振り返り『良かったな』というように思えればいいなと思っていいます。自然学校が5年生だけの取り組みで終わってしまい、6年生は6年生で全く違うというんじゃないで、5年生で体験した5泊6日の自然学校が、（その後の）6年生にも大きな影響を与えるような、そんな取り組みにしていきたいと思っています。

【先生が生きて生きている自然学校】

自然学校に、良い自然学校、悪い自然学校っていうのがあるかどうかはわからないですが、少なくとも、子どもたちが生きて生きている自然学校と子どもたちが遊んでいる自然学校があるように思います。

生きて生きている自然学校は何が違うかというと、先生が生きて生きている自然学校に比べて先生が子どもと一緒に遊んでいる自然学校に比べて、一方、子どもたちが遊んでいる自然学校は、先生も生きて生きている（指示する）言葉が多くなっている気がします。「もっと先生たちも楽しみましょう！」と言いたいですね。

子どもたちの視点に立つて子どもたちと一緒に活動する。学校ではそうして子どもたちと過ごしておられるのに、なぜ自然学校に来たらできないのかなと思います。自分自身も楽しむ、子どもたちと一緒に楽しむというスタンスが大事じゃないかなと思いますね。

【学校の外の力を巻き込む自然学校とネットワーク】

自然学校は、もちろん学校の教育課程に位置づけられたものなのですが、これからの自然学校は、学校以外のいろんな人たち（の力）をいかに巻き込むかということが重要になってくると思っています。

学校の先生方は教えるプロですが、必ずしも自然体験のプロというわけではありません。だったら、もっと学校の中にそういうプロの力を積極的に取り入れていくべきだと思っています。その時、すべてを学校の先生がコーディネートするのは難しいことになりますから、そこで地域（社会）とかNPOといった教育行政以外の部局にも協力してもらい、地域のコーディネーターを育成活用していくことが必要になってきます。

学校の中で完結してしまうのではなく、地域を巻き込んだ自然学校にしていけたらと思います。そのためには、地域のいろんな分野の知恵袋的存在の人たちやNPO、関係団体などとの連携・ネットワークづくりがこれからの大きな課題になってくるのだろーと思っています。

【指導補助員の養成】

指導補助員の力量を高めていくことが必要ですね。指導補助員のほとんどが大学生やフリーターと呼ばれる若者たちです。5泊6日の期間中、子どもたちと生活面もプログラム面も一緒に活動（生活）するわけですから、大きな影響力を及ぼすことになります。

ところが、その指導補助員の約半数が自然あるいは児童の指導に

る専門的なスキルがない、救急処置（ファーストエイド）の知識もないというのが現状です。これはただ「若いだから仕方がない」では済まされないことです。自然学校のより一層の充実を求めていくのであれば、指導補助員のあり方やどのように育成（養成）していくかということについて、学校だけではなく、教育行政や私たち（大学関係者）のよう

【実施期間5泊6日の継続】

最後に自然学校の期間（5泊6日）についてです。これについては兵庫県が他とは違う特色を持つということも含めて、5泊（6日）を維持するべきだと思っています。私たちが行った調査からも、（宿泊体験活動の実施期間が）4泊までではなかなかいい効果は出ていないのですが、5泊目から子どもたちに与える「影響効果」は急激に高まるんですね。6泊目ではさらに子どもたちに与える効果が高くなっています。

そういうことを総合的に考えると、兵庫県は自然学校の5泊6日という実施期間は継続していきたいものであると思っています。

平野

ありがとうございます。私は福島県にある国立少年自然の家勤務してることがあります。そこでも（今の高見先生のお話にもあったように）楽しめない先生が結構多いと感じました。先生方が楽しめない理由のひとつに、周り（周りの目）を気にし過ぎていると



いうことがないでしょうか。他の学校の先生の目とか施設の職員の目を気にし過ぎている。普段の学校だったら何ともないけど、他人から見られていると過敏になって指示的な言葉が増えたり連れてきた子どもたちを良く見られたいという気持ちで過剰に出てしまつて、結局、先生も子どもたちも楽しむことができなくなっているのかも知れませんね。もっと普段通りを心がけていただくと、少し楽しむ姿勢といったものも出てくるのかなと感じました。

土井

今、「子どもの居場所づくり」ということをいろんなところでやっていますね。その時に、こうした野外活動とか自然体験っていうのが重視されています。

【野外活動のグループワークを学校教育へ】

「子どもの居場所」っていうのは物理的なものじゃなくて、今、向かい合っているその人（相手）の中に自

分があるかどうかなんだろうと思います。『この人の中に自分がある』と感じるとすごく親しくなってお互いの距離がぐっと近くなりますね。

そういう居場所が保証される最も重要なものは「小集団」であることです。何百人もの子どもを前にして拡声器を片手に喋っても、誰も聞いてないですね。なぜかという、今喋っている人の中に自分が居ないからです。子どもたちは本能的にそれがわかるのだと思います。

ところが、小集団の中で、その子に向かっ（具体的に）話をすると、その子どもは相手の中に自分が居ることを感じるから、自分のこととして受けとめ話を聞き動くということになりますよね。これが野外活動における組織（集団）であり、組織として動くということなのですが、その組織が活かされないようなやり方を学校教育の中でたくさんやっているのです。

そうではなくて、野外の中で子どもたちと一緒に生活する中で、組織（集団）を組み立て動かしていくという野外活動の手法を、学校教育の中に活かしていく（取り入れていく）ことが必要なのだと思います。

簡単に言えば、「グループワーク」ということなのですが、自然体験活動の場というのは、お互いに居場所があるという関係はどうやって築いていくか、それを築いていく方法といたったものをまさに実践できるところなのです。そして、その実践を学校教育の中に持ち帰り活かすことで、その学級、学年という組織の構成力・凝集力、集団としての教育力・

学習力といったものが飛躍的に伸びていくというように思います。

平野 ありがとうございます。それでは校井所長、自然学校で培った力、経験を学校教育の中へどう活かしていくべきなのかということについてお願いします。

校井 私は、子どもたちが培った力や経験を活かすかどうかという点ではなくて、学校の先生が自然学校・体験活動で培った力を、その後、子どもたちにどう活かしていくかということが大事じゃないかなと思うんです。

【思い出のトリガー（引き金）】
この前、施設を利用される先生と打ち合わせをした時のことですが、森の中で活動することを提案しましたが、すると、先生は「生徒指導上少し問題のある子がいて心配」。でも、その子は昆虫が大好きで、虫のことならすごく詳しいんです」と言われる。そこで、他の子どもたちは施設のスタッフがみて、先生にはその子と一緒に遊んで（活動して）もらうことにしました。その活動で、その子と先生の間にできた思い出とか、その子との関係づくりといったものが、学校へ帰ってから、その子にも先生にも活きたと考えたからです。

つまり、先生も子どもと一緒に手をとって楽しめばいいんですよ。（ただしその時に、どの子の手をとるか、どのグループに入るかっていうのはよく考える必要がありますね。）
そして学校に帰ったら、「あの時、

あんなことやって楽しかったよね」って思い出話をしながら、「あの時、あんなことやったね。じゃあ今度もやってみようよ」いうように思いうれしさを引き出して次の活動を喚起する。

これを「思い出のトリガー（引き金）」と言っているんですが、子どもたちが、楽しい思い出を引き金にして、その時の経験（体験）を思い出して「そうだったな。（あの体験を）またやってみよう」って思ってくれれば先生と共感できたものが一番強いものになっていくんです。そういう「思い出のトリガー」を体験の中でたくさん作っておいて、「あの時は、先生も楽しかったな」とその引き金を引いてやれば、子どもたちはぐっと素晴らしい変化を見せてくれると思います。

そのためには、先生は子どもたちの中にいる、子どもたちと一緒に思い出をつくらせてください。そうでないと、学校へ帰って学校教育の中で子どもたちとその体験を活かしていくことができない時、子どもたちと共感した思い出がないと、何が活かせるのかどう活かせるのかわからないですよ。

平野 ありがとうございます。残り時間も少なくなってきました。残ったので、最後に一言ずつご発言をいただきたいと思います。

校井 私は、文部科学省だけでなく、国土交通省や農林水産省と連携した仕事も随分していますが、確

かに学校だけではどうしようもない面もあります。だけど、学校だけではどうしようもないのだから文部科学省だけでもどうしようもないってこともあるんですよ。

だから、農林水産省、国土交通省、環境省といったところとも連携していかねばならないと思います。その中で、農林漁業関係とか社会福祉関係といったいろんな人々と、何か一緒に（連携して）できることはないだろうかと、いろいろな協力（連携）の形を考えていくべきだと思います。

それから、5泊6日の実施期間のことですが、5泊6日にこだわるべきでないだろうということもあるとは思っています。例えば農業なんかだったら2泊3日を2回、田植えと稲刈りの時期にやる方がいいのかもしれない。しかし、その期間がないとできないことがある、その期間がないと子どもが変わらないということも事実なんです。30泊31日の体験活動なんかをやると子どもたちはやっぱりとてつもない変化を起こしますよね。

実施期間の問題はよく議論されますが、この期間があるから子どもたちが変わる（成長する）チャンスが大きくなっていることも事実としてある。ただし、なぜその期間が必要なのかということや、これをやりたから（やるために）これだけの期間が必要なんだというように、これについてしっかりと議論していかねばならないものだと思います。

平野 ありがとうございます。では土井先生お願いします。

土井 ゆとり教育といわれますが、文部科学省がいつているのは「ゆとりと充実の教育」なんです。その「充実の」という部分が抜け落ちてしまっているように思われますが、ここ兵庫県は長期のキャンプや合宿、自然体験活動を早くから実践してきた、まさに「ゆとりと充実の教育」の先進県として、各県や私たち野外教育関係者からもずっと注目されてきています。ぜひこの流れを絶やさないように、他の都道府県の模範になるよう今後とも頑張ってくださいと思います。よろしくお願いします。

平野 ありがとうございます。では高見先生お願いします。

高見 最初に、兵庫県の自然学校と他府県で行われている自然体験学習の目的にはあまり差がないといったことを話しましたが、その目的には、例えば「自然の中で体験活動をする」ということで子どもたちにいろいろな感動を与えるとか「集団生活の中で基本的な生活習慣を身につけさせる」といったものがあがってきます。

そこで、学校の先生方がどういう思いで自然学校をやられるのかということが、重要だと思えます。自然学校の目的に「生活習慣を身につけさせる」というようなことを掲げたと思います。その目的（目標）は、自然学校で体験したり集団の中

で生活を見つめ直したりして、学校に戻った後、学校や家庭の中でそれが引き継がれる（継続される）ことで達成される（習慣になる）わけですから、やはり、自然学校後のことを意識してやってかないといけないだろうなと思います。

目的（目標）が「思い出をつくる」ということであれば、目標の中に中途半端に「生活習慣を身につける」なんて入れずに、子どもたちに感動体験を与えるような仕掛けを徹底してやっていく。そういう自然学校があってもいいのかなと思います。つまり、先生方が子どもたちに何を感じ、何を学んでほしいかということから自然学校のプログラムは違ってくると思います。少なくともうちの学校では自然学校をどう位置づけて、どんなことをやろうとしているのかといったことについて先生方のコンセンサスがとれば、自然学校が一発の打ち上げ花火で終わってしまわずに、学校として継続した取り組みがなされるのではないかなと思います。

平野 ありがとうございます。予定していた時間を過ぎてしまいました。4年ほど文部科学省に勤めていました。体験活動に対する考え方については、文部科学省も揺れています。（ご存知のように）学力のことを一生懸命に言っている人もいますけど、一方で、今年5月に中央教育審議会の答申で「青少年の意欲」というテーマで答申が出されると思いますが、そのキーワードは「非日常・不便・集団生活」

です。つまり、子どもたちの意欲を高めていくためには、子どもたちを少し日常から離れた非日常の中で、少し不便で、しかもそれを集団で生活するような場や機会を与えることが必要なんじゃないかということを進めています。

揺れて困るのは現場の先生なので、本当はあまり揺れてはいけないのですが、多少揺れているのが現実だと思います。しかし、ここ兵庫県には自然学校といった全国でも有名な取り組みや、今日は話題に出ませんでしたが、中学校での「トライやる・ウィーク」もあります。それらの本当に全国でも有名な（体験活動の）柱があるわけですから、その柱を無駄にするようなことはないだろうと思います。

まとめになるかどうかかわかりませんが、（パネリストの先生方の話しをうかがいながら）指導者自身が持つ知識や技能、あるいは施設が提供するプログラムといったものはとても大事です。しかし、やはり最終的には、指導者、これは学校の先生だったり施設の職員であったり、それを支援する外部の指導補助員であったり講師だったたりすると思いますが、それぞれの立場で子どもたちを支援する指導者の意識や関わり方がとても重要だということに改めて気づかせていただきました。星野先生の基調講演の最後にも「やっぱり人ですね」という言葉がありました。その言葉をまともとしてこのシンポジウムを終了させていただきます。ご協力ありがとうございます。

編集後記

今回の機関紙どんぐりは、平成18年1月26日に県民小劇場で開催しました「自然学校・体験活動フォーラム」の特集第1弾として、基調講演とシンポジウムの要約を掲載しています。紙面の都合上、基調講演の後半部分やシンポジウムの質疑応答の部分等掲載することができませんでしたが、野外活動・野外教育の第一人者である先生方の講演やシンポジウムの中での提言は、自然学校・体験活動の意義や効果、可能性を考える上での大きなポイントであっただけでなく、学校教育の様々な場面に合致し活かされるエキスやヒントがたくさん含まれていると、編集作業を通して改めて強く感じました。

自然学校・体験活動フォーラムに参加いただいた多くの方々に感謝の気持ちを込めて、この「フォーラム特集号」をお届けします。

表紙題字 初代校長 朝日稔



※参加者からの質問・意見及びそれに対するパネリストの応答の部分については、紙面の都合上、割愛させていただきます。

なお、高見先生の発言にありました「自然学校が与えた影響」等については、県立南但馬自然学校調査研究委員会発行の「平成15・16年度研究紀要（平成17年3月発行）」を参照ください。